

博士学位論文 概要書

請求者

寺田 詩麻

題目

明治・大正期東京の歌舞伎興行——大劇場における経営の変化を中心に——

概要

本論文は明治・大正期の東京の歌舞伎における劇場経営について考察を試みるものである。とくに、経営代表者としての座元が興行内容と収支の責任を取る明治初年ごろの体制から、会社方式を導入してゆく過程でどのような新たな劇場や団体が出現し、何が変わったのか考察を試みている。対象とするのは十二代目守田勘弥（守田・新富座）、明治座、歌舞伎座、田村成義（市村座）、帝国劇場、松竹である。

目次による内容の一覧は以下の通りである。

はじめに

凡例

第一章 守田座から新富座へ——十二代目守田勘弥——株式会社方式の試行まで——

第一節 安政から文久年間の守田（森田）座

付録 翻刻「差上申御詫一札之事」

第二節 新富町移転までの守田座

第三節 明治十年前後の新富座

第四節 新富座の株式会社化

第二章 興行師田村成義——その明治十年代から二十年代——

第一節 田村成義と横浜

第二節 田村成義と千歳座

第三節 歌舞伎座株式会社の設立

第三章 大正期東京の歌舞伎興行——松竹の進出——

第一節 明治三十年代京都の松竹

第二節 大正期東京の松竹

第三節 大正期の市村座

第四節 帝国劇場で演じられた劇

第四章 作品の上演 —— 興行に関わる問題を中心に ——

第一節 曾我の「対面」と「仇討」—— 黙阿弥以降 ——

第二節 田村成義と「四千両小判梅葉」

第三節 「平山晋吉」印のある「桐一葉」台本

第四節 長谷川時雨「さくら吹雪」について

おわりに

付章 歌舞伎の興行と資料

一 明治東京の歌舞伎の番付——早稲田大学演劇博物館所蔵資料を中心に——

二 『東都演劇年鑑』と稿本『続々歌舞伎年代記』

初出一覧

主要参考文献一覧

以下は「はじめに」、本文、「おわりに」、付章の概要を順に記す。

はじめに

まず、歌舞伎の興行の変遷について近世初期から近代まで目配りをしながら、「興行史」として学問的に位置づけたものに守屋毅氏『近世芸能興行史の研究』がある。本論文の対象とする時期は、直接には守屋氏に続いている。

明治・大正の東京の歌舞伎研究で基礎となるのは、関根只誠纂録・関根正直校訂『東都劇場沿革誌料』下、田村成義編『続続歌舞伎年代記 乾』、伊原敏郎（青々園）『明治演劇史』、同『団菊以後』、同『歌舞伎年表』とくに第六から八巻までである。『年代記』については利倉幸一氏による坤巻がある。秋葉太郎『東都明治演劇史』、河竹繁俊『日本演劇全史』第八篇以下は、明治以降の演劇史をたどる通史である。「新劇史」とはするが、秋葉『日本新劇史』上下も歌舞伎と新演劇（新派）や新劇とのつながりを考える上で重要である。

また本論文で考察の具体的な対象とした十二代目守田勘弥（守田・新富座）、明治座、歌舞伎座、田村成義（市村座）、帝国劇場、松竹についてはそれぞれまとめられた文献資料がある。主なものだけを順に並べてみる。

・守田勘弥……少女庵主人「守田勘弥」（新聞連載）、大槻如電『第十二世守田勘弥』、木村錦花『守田勘弥』

・明治座……木村錦之助（錦花）『明治座物語』、藤田洋氏『明治座評判記』正統

・歌舞伎座……木村『近世劇壇史 歌舞伎座篇』、『歌舞伎座』、『歌舞伎座百年史』本文篇上下・資料篇

・市村座……『歌舞伎 研究と批評』二十三特集「長町市村座」

・帝国劇場……杉浦善三『帝劇十年史』、帝劇史編纂委員会『帝劇の五十年』

・松竹……白井信太郎『白井松次郎伝』、城戸四郎編・脇谷光伸『大谷竹次郎演劇六十年』、『松竹七十年史』以降の社史

個別の人・劇場を扱う研究として木村『興行師の世界』、阿部優蔵氏『東京の小芝居』、円城寺清臣氏『東京の劇場』などがある。年表に小宮麒一氏『歌舞伎・新派・新国劇 上演年表』第六版、『歌舞伎・新派・新国劇 配役総覧』第七版がある。新劇を対象とはするが、歌舞伎との関わりを見る上で田中栄三『明治大正新劇史資料』も必要である。

一次資料としては劇場の発行する番付類や定期刊行物、とくに『歌舞伎新報』、『読売新聞』、『都新聞』、『演芸画報』、『新演芸』などがある。これらを参照し、紹介しながらまとめている先行研究として、松本伸子氏『明治前期演劇論史』、『明治演劇論史』、小櫃万津男氏『日本新劇理念史』明治前期篇・明治中期篇（正統）、倉田喜弘氏『日本近代思想大系十八 芸能』、同氏『芸能の文明開化 明治国家と芸能近代化』、同氏『東京の人形浄瑠璃』（一部歌舞伎に関連する記事がある）などがある。

近年の主要な研究成果として、書籍は漆澤その子氏『明治歌舞伎の成立と展開』、神山彰氏『近代演劇の来歴 歌舞伎の「一身二生」』、同氏『近代演劇の水脈 歌舞伎と新劇の間』、佐藤かつら氏『歌舞伎の幕末・明治 小芝居の時代』、日置貴之氏『変貌する時代のなかの歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史』論文は後藤隆基氏、神田由築氏らの諸論考がある。

ここではまず前段として、江戸歌舞伎の官許を受けた大芝居の状況について櫓の交代と劇場内の主な職掌を概説したあと、天保の改革は、実は経営代表者である座元には有利な条件を与えるものであったにもかかわらず経営は好転しないこと、その理由に火事による頻繁な類焼、役者の給金の問題、移転により交通の便が悪くなったこと、宮地芝居・小芝居、見世物、寄席の隆盛を挙げる。そして、

①巨額の負債を抱える経営難は明治以降、歌舞伎をとりまく政治・文化の状況が変わると改善されるのか。そのためにどのような試みがなされるのか。

②大芝居であった江戸三座は昭和戦前期までにすべて退転するが、それはなぜなのか。

③明治以降登場するさまざまな劇場は、どのような人々が設立し、経営に関与するのか。

④劇場は順次会社方式を導入してゆくが、会社それぞれに少しずつ違いがあるらしい。どういうところが違うのか。

以上四点の問題を設定した。最後に、全体に関わる用語「座元」「大劇場」「俳優」の三つについて、使用する理由を注記した。

第一章

第一章は、江戸三座のひとつであり、明治時代の東京における大劇場の代表でもあった新富座と、その座元であった十二代目守田勘弥を対象に、明治十年代までの経営に関わる問題を取りあげて考察する。

第一章第一節

本節では、安政期に河原崎座から櫓交代後、経営的に苦しい状況が続いた新富座の前身守田座の

状況を述べる。次に、市村座から招聘された中村翫左衛門の仕事を書した上で、その実子十二代目守田勘弥が、はじめはあくまでも借財を肩代わりするための養子となったが、結果的に守田座の資金・興行内容の決定権・劇場の代表者としての名義、全てを掌握した座元となったことを述べる。

第一章 第一節 付録

前節の付録として、文久二年（一八六二）十一月、十一代目守田勘弥と芝居進退人翫左衛門から魚河岸・四日市・小網町・新場に宛てて、積場について不行届があつたとして差し出した詫証文と推定される資料を翻刻し、そこから見えてくる守田座と魚河岸の、俠客を媒介した関係について考察を加えている。

第一章 第二節

本節では、幕末から明治五年（一八七二）新富町へ移転するまでの十二代目守田勘弥の人となりと興行の傾向について整理した上で、移転当時の守田座および勘弥の動向を整理した。その時期の守田座の特徴は、下り役者や若手の役者を多く用い、江戸の大芝居から引き続き三座のリーダーシップを取ろうとしつつ、茶屋との関係を整理し、金の流れを合理化しようとする姿勢を見せていたことにある。

第一章 第三節

本節では、明治時代の東京の劇場宝樹座と新富座（守田座から明治八年一月改称）との関わりについて考察した。明治九年（一八七六）十一月類焼後、十一年六月新富座を新築再開場させるまでの間に、十二代目守田勘弥と新富座の関係者たちは宝樹座とその座元宝樹又兵衛に接近した。なかなか劇場の本建築が進まないまま、仮の劇場での興行許可を切れ切れに取って続いていた新富座は、勘弥の親族を名義上の座元として宝樹座の持っていた鑑札を得、新たに東座と仮称する劇場の建設と興行を行おうとしたのである。

第一章 第四節

本節ではこれまで述べてきた守田座（新富座）の動向に留意しながら、新富座が明治八年・十年・十三年に設立した株式会社についての資料を紹介し、その特徴と、十二代目守田勘弥が関与した新富座の株式会社化の実体と意義について考察する。その実体は、負債をそのまま資本金と見なし、株式に分割し、債権者に株券を渡して配当で返済して行くことを目的とするものであった。一連の会社設立規則を見ると、債権者が座元に直接金銭の管理をさせない体制を作ろうとしていることも見えてくる。

第二章

第二章は、はじめは代言人として十二代目守田勘弥と関わり、のちに専業の興行師となった田村成

義の履歴と明治三十年代初頭までの活動について記述する。

第二章 第一節

本節では、明治以前からの田村の履歴について調査し、判明したことをまとめたあと、これまであまり言及されていない横浜との関わりのあるさまを記す。具体的な内容が明らかでないところもあるが、明治十年代の後半、田村は横浜で代言人事務所を開業し、自由党員であり、同時に幕末から明治の観劇団体で横浜の人々が多かった六二連とも、おそらく関わりを持っていた。

第二章 第二節

本節では、明治十八年（一八八五）十月、千歳座で興行師として活動を開始する田村成義の動向について考察を試みる。東京の劇場の経営状況が混沌としてきたこの時期、春木座で革新的な興行を行った三田村熊吉は千歳座を借り受けようとして失敗した。田村は十二代目守田勘弥と緊密に協力して、千葉勝五郎と福地桜痴が設立を企てた歌舞伎座に対抗し、四座同盟の結成に尽力する。それが破れたあと、二十三年以降に田村の歌舞伎座での活動が本格的に始まってゆくようである。すくなくとも当初は、勘弥の代理の色合いが濃かったのではないかと考える。

第二章 第三節

本節では、本論文の第一章第四節で検討した新富座の例をふまえた上で、明治二十二年（一八八九）十一月初興行以降東京最大の劇場であった歌舞伎座が、二十九年四月八日創業総会を行った株式会社の設立経緯と意義について述べている。この会社の設立には田村も関与しているが、慶應義塾や渋沢栄一と何らかの関わりのある実業系の人々が当初から複数参加し、株式を一般に公開して配当を出し、長期のスパンで継続した。その意味で、三十九年設立される帝国劇場に先駆する劇場の株式会社である。

第三章

第三章では、大正期の東京において歌舞伎だけでなく他の演劇の興行も手がけ、東京の興行界の中心的な位置にあった三つの組織、松竹合名社、市村座、帝国劇場（第一次）を順に取り上げ、その活動の特徴を考える。

第三章 第一節

第一節、二節では、京都出身の興行師で大阪、東京へ進出した松竹合名会社（のちの松竹合名社）を対象として取り上げる。

本節の目的は、本論文の第一章、第二章で述べてきた、十二代目守田勘弥や田村成義の行った東京における歌舞伎の興行方法と比較して、松竹合名会社の経営がどのような特徴を持つのか考察することである。それは、出自が仕打^{しうち}であることを利用し、劇場経営に関わっても無理に株式会社方

式へと転換はせず、新演劇（新派）の人々が試みる具体的な改革は取り入れる合理性である。

第三章第二節

本節では大正期の東京の大劇場における劇場経営を、会社制度を取り入れつつ漸進的かつ具体的な「改良」を実行する過程であると定義した上で、明治末から大正に東京へ進出した松竹とその代表者である大谷竹次郎の、興行の特徴について検討した。第一はかつて春木座で三田村熊吉が手がけた方法や帝国劇場とも共通する入場制度の具体的な改革、第二は観客の理解を越えない新しい台本の探求である。その二つは具体的な合理性を求める点で同根のことだと考える。

第三章第三節

本節で扱うのは市村座である。ここではまず、明治四十一年十一月に田村成義が興行を継続的に開始するまでの前史をまとめた上で、大正期の市村座が土地建物を株式方式で事実上所有しながら、極めて少人数による経営が行われていること、結果的にはあるが歌舞伎座の若手俳優たちを教育的に養成しつつ、六代目河原崎権之助の興行方針に影響されたと推定される固定的な興行の構成を行ったこと、田村の作品理解は多くの義太夫狂言とは対蹠的なものであったと思われることを特徴として述べている。そこにあるのは素朴な合理性の追求であった。

第三章第四節

本節で扱うのは、明治四十四年（一九一一）三月に興行を開始した帝国劇場である。帝劇は、それまで劇場と関わりの薄い三井・三菱財閥の関係者および慶応義塾卒業者が経営陣の多くを占めるところが歌舞伎座株式会社と共通している。また西洋を意識的に模倣しながら、具体的な興行方法に経営陣の経験してきた鉄道・百貨店業界から摂取したと見られるところがあり、川上音二郎の興行や明治三十年代の宮戸座に共通する部分も多く持つ。

第四章

第四章では、明治・大正期の歌舞伎で上演された作品のうち、興行の動向によって作品が選択、改訂、演出されたものを四つ選び、その事情を考察している。

第四章第一節

本節では、明治十八年一・二月千歳座で上演された河竹黙阿弥作の「対面」、上方系と推定される別の「対面」、福地桜痴と森鷗外の作品を順に取り上げ、「曾我の対面」と狩場での「仇討」の語られ方はどう変わっていったのかを考察する。結論としては、曾我の仇討を歌舞伎で脚色する場合、儀式性と装飾性が必要であることと、にもかかわらず明治・大正の歌舞伎に関わった人たちは、さらに近代的合理性を兼ねそなえる脚色方法を求めて試行錯誤していたことが明らかになった。

第四章第二節

本節では、河竹黙阿弥の晩年の代表作の一つ「四千両小判梅葉」について、明治十八年（一八八五）十一月千歳座における初演の制作と上演の過程を検討した。その上で、この作品の制作にも関与した興行師田村成義にとつては、筋の流れが単純で「昔あったことをそのまま描く」場面が構成が、田村の前歴を生かすものであり、彼が歌舞伎に求めたものとも合致したと考える。

第四章第三節

本節では、まず早稲田大学演劇博物館に所蔵される「イロハ台帳」と仮称される台本のシリーズについて調査した結果を記す。その上で「二」に所蔵される、明治三十七年（一九〇四）二月東京座初演のものと推定される「桐一葉」の台本が持つ問題について考察を加えている。興行上の問題として見せ場となる場面を後半にまとめたいという意向もあったようだが、本節ではそれ以上に、淀君の述懐がカットされかけた形跡のあることから、装飾された言葉や声を聞かせる述懐を逍遙の原作通りに上演するのが、竹柴晋吉にとって困難だったのではないかと考えている。

第四章第四節

本節では、小説家・劇作家の長谷川時雨によって書かれ、明治四十四年（一九一一）二月歌舞伎座で六代目尾上菊五郎らによって初演された「さくら吹雪」を取り上げる。まず、先行研究で従来指摘されてこなかった典拠を特定した上で、「さくら吹雪」は道徳から自由にならない女性の苦しみを立て的に描こうと試みたことが特色であるとした。実際の上演は内容を必ずしも正確に理解したものではなかったが、主演の菊五郎が当時から發揮していた、実際にあったこと・あることをそのまま描こうとする傾向がよく見受けられ、時雨との提携を確実にした意味で重要である。

おわりに

ここでは結論として、最初に挙げた四つの問いについて

①江戸時代以来の、負債を抱えた経営難は明治以降も全く解消されない。解消するために、たとえば守田勘弥や田村成義は茶屋・出方の廃止を含めた改革を唱えるが、廃止にはいたらない。勘弥は座元を名義上のみの幼年の者に変えたり、負債を資本金と見なす会社を設立したりするが、長期的に継続する解決法にならない。

②中村座は明治二十六年（一八九三）に火事で焼失後再建できない。市村座は四十一年から歌舞伎座の若手俳優が出演することで一時持ち直すことができたが、その前は完全に大劇場としての格を失った状態だった。新富座は勘弥が経営を立て直すことができず、その後もほぼ市村座と同じ状態で、四十三年から松竹が直営劇場とすることでやっと延命する。それはひとえに、座元を経営代表者とする経営の不調を転換するため、次の段階へ移行できなかったのが原因と考えられる。

そのことは、江戸時代に（すでに形式的なところはあったが）行われていた、世襲相続を基盤とする経営が幕府の助けを失うと完全に崩壊したことも示している。

③たとえば千歳座（のちの明治座）のように、小芝居からはじまって官許を得て大劇場になった劇場があり、また歌舞伎座のように新興ではあるが明治政府とのつながりを持つ人々が設立し、個人の安定した資金力をもとに経営を続けるうち、劇場外部から実業家も参画する株式会社方式へ切り替えることに成功する劇場が出現する。

これらは、明治六年（一八七三）に官許を受ける劇場が十三座（実際に開場するのは十座）に増加し、二十三年には道化踊場として管理されてきた劇場の中からも「小劇場」として認可されるにいたるものが出てくる、官許の劇場増加の傾向に乗って出現する。これは、取締側にとっては税収の安定と統一的な管理が目的でもある。

④歌舞伎座、帝国劇場、市村座、松竹は会社方式を導入する。明治座は、明治四十五年から伊井蓉峰が経営するが不調で、大正八年（一九一九）にいったん松竹の所有となる。

このうち、歌舞伎座と帝国劇場は劇場外からの実業家が参画する取締役会が経営を行い、株式を上場する株式会社である。会社発足当時、土地建物は会社の所有である。市村座はまず少人数で経営を行っており、大正九年から株式会社となるが、その状態がすくなくとも田村成義の生前は根本的に変わるわけではない。土地は三十年間の地上権所有、建物は自前である。松竹の場合は、複数の劇場を経営するが、その所有のあり方は劇場によって違う。明治三十五年ごろの発足当時は個人経営に近い形態の合名会社であり、映画部門から先に株式会社へ改組してゆくのは大正後半以降である。

土地建物を所有していた歌舞伎座と帝国劇場の経営は、取締役会の分解や興行の不調で不安定となり、昭和五年（一九三〇）までに松竹が経営に関与することになる。市村座も関東大震災による焼失の打撃から、バラック建ての劇場で再出発はするが、ついに本建築を建て直すことはできなかった。六代目尾上菊五郎をはじめとする出演俳優たちは、すべて松竹の配下に属することになる。

とした。そして最終的に東京の劇場が抱えた問題は土地建物の所有にあり、松竹は土地建物を切り離して「興行すること」そのものを会社にした点に特質があると考えた。また、興行の合理化とは興行にまつわる夾雑物の整理であり、具体的な上演にも合理化の傾向は影響を及ぼしていたと考える。

付章

付章では興行に関係する文献資料を取り上げ、その問題について考察する。

付章一

本節では、明治時代の東京の歌舞伎・新演劇（新派）・新劇の興行に際して出版された、現在の

ポスターやプログラムにあたる辻番付・絵本役割・筋書について具体的な形態変化を報告しながら、変化から推定することのできる劇場・興行の変化についても述べている。

付章二

本節では、東京都立中央図書館に所蔵される『東都演劇年鑑』二十三冊が、採用項目の一致や貼り込まれた野紙を検討することで、明治から大正期にかけて田村成義の編纂した稿本『続々歌舞伎年代記』の原稿の一部と推定できることを述べている。また、その状態から推測される稿本の成立過程についても述べている。